

2017年を迎えて



早稲田大学
基幹理工学部情報通信学科 教授
一般財団法人日本 ITU 協会
出版・編集委員会 委員長

かめやま わたる
亀山 渉

新年、明けましておめでとうございます。

早いもので、出版・編集委員会の委員長を仰せつからず、二回目の新年を迎えました。新しい年を迎え、会員の皆様との橋渡しであるITUジャーナル及びNew Breezeの更なる発展を目指し、気持ちも新たに臨んで参りたいと思います。

ところで、唐突ですが、先日の研究室のゼミでの出来事をお話したいと思います。研究進捗を発表する学生が自分のPCをプロジェクタに接続する際、ディスプレイケーブルの接続で少々手間取っておりました。本人いわく、PCのアナログRGB端子の向きとディスプレイケーブル端子の向きが合わないとのこと。ご存知の通り、アナログRGB端子は形状が台形型になっているD-Sub 15であり、台形の向きを揃えれば接続できないことはありません。本人もそれに気づいて無事接続し、スライドをスクリーンに映すことができました。その際、何気なく、その学生に、どうして端子の形状が台形なのか分かるかと聞いたところ、答えられませんでした。そこで、急きよ、その学生の研究発表を中断し、D-Sub15のピン位置と信号線との関係を説明し、信号線の接続ミスを防ぐために端子形状が台形になっていることを話しました。また、同様の理由で、USB端子、HDMI端子等も、逆向きに接続できない形状になっていることを説明しました。

この出来事で、今更ながらに気づいたことが2点あります。1点目は、当たり前ですが、中の仕組みが分からなくても誤って接続させない端子形状を規格化した素晴らしさです。2点目は、中の仕組みが分からないと、なぜこの形状なのかの理由が結局分からないということです。

翻って、国際標準の規格文書を考えてみます。もちろん、規格文書は標準規格について過不足なく技術的な規定内

容を書くものですから、理由についてあまり述べることなく、淡々と技術仕様を記述します。しかし、規格文書の読み手としては、時々、細かな点で、どうしてこうなっているのか疑問に思うことも少なくありません。特に、その標準化作業に直接携わらずに、規格文書のみから標準の中身を知ろうとする際に起こりがちです。私自身、何度も経験したことがあります。標準を使う立場、あるいは、実装する立場からは、もちろん規格文書通りにすることが求められますので、理由は分からなくても実害はないのかもしれませんが、それで本当に良いとは言えないでしょう。

以上の点を改善するのに、ITUでは「Appendix」、ISOでは「Informative Annex」を積極的に利用するという手があります。規格文書本体に記述するには適さない内容でも、読者にとって有益な情報、理解を助ける情報、そして技術採用の理由などが該当すると思われます。このことによって、標準化作業に直接携わっていない人にも共通に規格文書の理解を助ける機会を与え、並びに、深い理解を読者に促すことで、当該規格の将来的な発展に寄与すると考えられます。規格文書のエディタとしては、そもそも与えられた仕事量が多いため、余計な作業をしたくないというのが本音かもしれませんが、作業部会のメンバに協力してもらい、この部分にも力を入れていただくのはとても重要ではないかと感じます。もちろん、規格の解説を本やWebで情報発信する方法もあると思います。実際、私の知り合いには、Webを活用して規格の解説をボランティア的に行っている方がいます。いずれにしても、規格文書の向こう側には読者が存在するのを意識する必要があるように感じますが、いかがでしょうか。

結びと致しまして、会員の皆様のご多幸とご健勝、そして本年が皆様にとって更なる飛躍の年となりますことを祈念致します。本年もITUジャーナルをどうぞ宜しく願い致します。